

## 幸福は計れるか

内閣府は、国民の「幸福度」を測る新しい指標に取り組んでいるようです。当初は、原案を4月に公表するとしていましたが、未だ公表されるまでには至っていないようです。

この、新しい指標化の狙いは、教育水準や治安、健康寿命などを数値化し、国内総生産（GDP）だけでは評価しきれない国民の豊かさを客観的に測定しようとするもののようですが、果たしてそのようなことは可能なのでしょうか。

内閣府が昨年3月に、国民の幸福感についてアンケート調査を実施していますが、それによると、10段階で平均値が6.5点で、欧州の調査と比べると0.4点ほど低かったとのこと。この6.5点にどれほどの意味があるのか、良く分かりませんが、こうした幸福度については、経済協力開発機構（OECD）でも世界共通の指標づくりが課題となっているようです。

しかし、そもそも一人の人間の幸不幸は、それぞれ個人の価値観の問題であり、お金持ちは幸福度高そうだという蓋然性は感じるけれど、しかしお金があれば幸せだというわけではありませんし、貧しいけれど幸せということも多分にあるのです。そうしたことからいえば、「幸せ」という個人の価値観にかかわる問題に国が干渉することは、適当だとは思えません。

中国とインドに挟まれた地域に、世界でも最も貧しい国の一つ、ブータン王国という小国があります。この国では、国王の提唱により、金銭的・物質的豊かさを目指すのではなく、精神的な豊かさ、つまり幸福を目指すべきだとする考えから、GNP（国民総生産）ならぬGNH（国民総幸福量）を作り、それによって国づくりを進めています。

この結果、ブータンでは国民の実に95%の人々が自分は幸福だと感じているとのこと。貧しくても美しい自然や伝統文化を大切にし、人と人の強い絆によって、心の豊かさを実感しているということではないかと感じています。

日本が、かつて非常に貧しかった時代の風景、社会の有り様を感じさせますが、だからといって、今の日本がブータンのようになれるとは思えません。

勿論、今のままエネルギーや資源を大量に消費し続ければ、宇宙船地球号は早晚破綻することは目に見えていますから、我々は、生き方を変える必要があることは確かです。こうした中、国が指標を作って、数値がこの程度だから国民の幸福度は高いとか低いなどと評価をしていくことはナンセンスだと思います。

政策を立案し、遂行するために様々なデータを集め、分析することは大事なことですが、国が先ずなすべきは、国民一人ひとりが自らの幸せを追い求めて努力できる社会、また、努力したことが少しでも成果として実感できるような社会を作っていくことにあるのではないのでしょうか。

(塾頭 吉田 洋一)